

我、 鉄路を拓かん

梶よう子

第一章 神奈川台場

一

「柴田さま、まことにこちらでよろしいので？」

弥市やいちは眉をひそめて、崩れかけた冠木門かぶきもんを見回した。幾年経たものか、門柱は腐りかけ、片側の扉は上部の蝶番ちようつがいが外れ、傾いていた。ちらと門扉もんびの隙間から中を窺うかがい見ると、雑草おが生い茂っている。どこもかしこも手入れをしていない有り様だ。

むろん両隣も武家屋敷ではあるが、このひと屋だけが殊更とつとつ酷い。

家屋もかなり年季が入っている。二階には繕よれて切れ切れの古簾ふるすだれが幾枚も下がっており、それが一層、古家たらしめている。一言でいえば、ぼろ家だ。

揚羽蝶あげはが二頭、戯たわむれながらひらひらと飛んでいるのが眼とに留とまる。これを長閑のどかというべきか、と苦笑する。

その一方、このような屋敷に此度の大工事を命じられた幕府の役人が暮らしているのには首を捻りたくなる。

弥市は、平野屋と名乗り、芝田町で土工請負を生業にしていた。

今日は、その役人と普請の見積もりをするため赴いたのだが、そもそもこの破れ家に人がいるのかどうかも疑わしく思えてきた。

弥市は前に立つ柴田の背に不安な眼を向ける。

むろん柴田の表情はわからないが、やはり戸惑っているのか、扉を開けるのを躊躇していた。

「ここで間違いはないはずだが」

柴田がぼそりと呟いて、門扉に指を伸ばしたとき、

「よう、ウチの前で、なにを突っ立っているんだえ？ 用事があるなら、遠慮しねえで入った入った」

背後からいきなり声が飛んできた。少し高めのよく通る声だ。

弥市と柴田が振り返ると、肩に手拭いを引っ掛けた武家が立っていた。ウチというからにはこの家の者であるのは確かだ。その人物は薄い唇に笑みを浮かべ、眦がわずかに垂れた人懐っこそうな眼をこちらに向けていた。三十そこそこの歳か。

「それがし、伊予松山松平家中、大目付柴田才治郎でござる。不躰ながら、勝麟太郎頭取をお訪ねして参ったのだが、そこもとは」

柴田が問うと、男は破顔した。

「おいらが、勝だが」

柴田が、失礼いたしたと頭を下げる。

「そうかえ、あんたが文を寄越した柴田どのか。朝から待っていらんだがよお、三日湯屋に行つてねえのに気づいてな。臭うわけではないが、せっかく客がくるから、ちつとはこぎれいにしたほうがいいと思つてよ。湯屋に行つちまった。後ろにいるのが、請け負いの平野屋だな。よろしく頼まあ」

早口でまくし立てた。

弥市は呆気にとられた顔で勝を見つめた。軍艦操練所教授方頭取きやうじゆかたという舌を噛みそうな役目に就いていると聞いていた。もつといかつい、武張った人物かと思つていた。薩摩島津家の御用達を務め、出入りを許されているが、ついぞこのような武家に会つたことはない。武家はみだりに笑うこともなく、軽口も控える。しかし、眼前の勝は飄々とした学者のような佇まいだ。たたりただし、口調は町人ふうだが。

破れ家で暮らしているのも、どこか腑に落ちた。

「お初にお目にかかります。平野屋弥市でございます。この度は、精一杯務めさせていただきます」

深々と腰を折ると、

「はっはっは。こつちもよろしく頼む。よしっ、名乗りも済んだ。

ともかく、入ってくんな」

勝は、それぞれ、とばかりにふたりの背を押しした。

勝は軋む廊下を進みながら、

「なんだえ、誰もいねえのか。お客が来るといっておいたのによ」
ひとりごちると、舌打ちした。

座敷に通されたが、内部も相当に傷んでいる。蜘蛛の巣など張り放題だ。日に焼けて茶に変色した畳は、あちらこちらがささくれ、障子を開けるのにも勘所があるようだった。

弥市の顔色を読んだのか、勝はぐるりと座敷を見回し、口を開いた。

「どうでえ、酷いもんだらう。もともとぼろ家だったのだが、先の地揺れで、さらにがたがたよ。柱は曲がるわ、所々雨漏りはするわ。もつとも、あのとき、大名小路の石塀は崩れたが、この屋敷は倒れなかった。どっちが頑丈なのか、わからねえなあ。平野屋、おめえはどう思う？」

急に問われて、弥市は戸惑った。

勝がいつている大地震とは、四年前の安政二年（一八五五）十月、江戸を襲った大地震のことだ。仕事を終えた弥市は奉公人とともに、芝田町の店屋敷へ帰る途中だった。薄曇りの夜空を見上げながら、

襷巻えりまきを巻き直したとき、徐々に足下がせり上がるような感覚に陥おちいつた。目眩めまいに襲われたのかと、奉公人の腕にすがった瞬間、轟音ごうおんがあたりを響き渡り、思わず膝ひざをついた。地面が右に左に激しく動き、屋根瓦がわらが落ちる音、通りに飛び出す人々の怒号、悲鳴。揺れていたのは、わずかな間だったが、恐怖が永遠に続くと思わせた。

芝田町の店屋敷、家族も幸い無事だったが、遠くにいくつもの火の手が上がり、炎に包まれていく町を見た。

その光景は、いまだに眼に焼き付いている。

勝はにやにやしていた。弥市は、はっとした。

そうか。おれが、どう答えるか試しているのだ。たかが土工の請負人と高くを括くっているのだろう。

「あの大地震では、場所によって地揺れが激しいところ、幾分、弱いところがあつたと聞いております」

弥市が口を開いた。

本郷ほんじょう、駒込こまじめ、青山あおやまのような台地では揺れは緩ゆるく、浅草かんだ、神田かんだ、深川ほんじよ、本所などは低地で地盤も弱いため、激しい揺れに見舞われた。

それは倒壊した家屋、土蔵などを見れば一目瞭然いちもくりようぜんだった。特に浅草はかつて大川の氾濫はんらんで湿った土地であり、もともと地盤が緩い。その上に町を作っているのだ。大きな地震ではひとたまりもない。

「このお屋敷のある赤坂伝馬町てんまちょうは坂下ではありませんが、比較的土

が高いので、揺れが多少抑えられたのかと思われれます。大名小路のある日比谷で被害が大きかったのは、やはり地盤の脆さでしょう。東照大権現さまが、入部の際、入り江を埋め立てた地でありますから、いくら地盤を固めても、人智の及ばない力が加われば、揺れは増幅され、ひとたまりもありません」

「ほう、なるほど」

勝が満足そうに顎を撫でる。

「それなら、海上に台場を造るつてのは、よほど堅牢にしねえと、いけねえつてことだな」

「左様で」

「けどよお、松山侯も難儀だねえ。横浜の開港目前に神奈川宿周辺の警護を任されるとは。で、その松山侯から直々におめえさんに此度の神奈川台場普請の話がいったのは、やはり品川の海上台場に携わったからかい？」

「そのように伺っております」

弥市は、勝をしかと見据えた。

台場は、砲台を設置するために造られた綾形状の地のことだ。日本近海にしばしば現れるようになった異国船を警戒した幕府や各地の大名家が防衛と迎撃のために築造した。

しかし、嘉永六年（一八五三）、亜米利加国から軍艦四隻を率いた

ペルリが浦賀に來航したのを機に、幕府はさらなる危機感を募らせ、江戸湾海上に台場を急遽築造した。

当初の計画では十一基。連珠状に並べ、海側から眺めたとき、江戸湾海上に、一直線に建造された城壁に見えるよう設計された。ペルリ再來航までの一年で三基が出来、その後さらに三基が完成したが、入費が嵩み、結果六基に留まった。

弥市は、同じ土工請負を営む尾張屋嘉兵衛とともに落札。下埋めに用いる土丹岩の切り出しの他、高輪の八ツ山の切り崩し作業にもかかわっている。

柴田がずいと身を乗り出した。

「この弥市は、土工請負人となって七年ほどですが、薩州屋敷の台場建造にかかわった際、迅速に数百の人夫を集め、たちまち作事を終えたというのが評判になりました。それ以降、薩州屋敷の土工をほとんど任せ、いまは我が家中の出入り並ともなっております。一昨年には、神奈川並木町の台場を完成させており、此度は海上の台場ゆえ、やはり品川に携わった平野屋が適任かと思われまして」ふうん、と勝は生返事をした。柴田がいささか色をなす。

「色々とやってきたのは、よおくわかった。けど、島津家のお出入りというのは奇遇だな。おれは、長崎の伝習所に赴いていた頃、薩摩に足を延ばして、藩主の斉彬さまにお会いしたよ」

齊彬は、西欧に眼を向け、先進の知識を吸収し、海防、国防に力を入れ、また、人材においても、家禄、家格などにこだわらず、優秀な者を登用するという賢侯である。

「これからつとときに亡くなつちまつて、残念でならねえ。今は、藩主を差し置いて弟の久光侯が薩摩を牽引しているが、兄貴みたいになれるか見ものだ。まあ、でも薩摩と繋がりがあつても悪くはねえ。この生業で七年つてことだが、親父さんの跡を継いだのかい？」

いえ、と弥市は心えた。

「あつしは平野屋の養子でございます。平野屋もあつしの実家も、雪駄と下駄を商つておりましてね、そうした縁があつたというわけや」

「おいおい、薩州屋敷への出入りはお養父つつあんの代からかい？ 生業が違つているが」

弥市はわずかに口籠もつた。

「いえ、養父は、あつしが平野屋へ入つたときにはすでに亡くなつておりました。養母が雪駄下駄の店を営み、島津家の仕立物御用を承つておりましたが、景気が悪く、あまり利が出なくなつたものですから、あつしが店を畳んで、土工請負を始めたのでございます。なんともお恥ずかしい話ですが、御用を務めておりました上に、養

母は茶の湯を能くしておりまして、隠居所には、薩州のご重役が母の点てる茶を楽しむにいらしており……」

勝も柴田もぽかんと口を開ける。

「そりゃあ、てえしたおっ養母さんだ」

「それで、商売替えの際、養母と懇意にしているお歴々にあらためて土工請負人としてのお出入りをお願いしたわけで」

ははは、と勝が大声で笑う。

「そんなおっ養母さんなら、大事にしなきゃいけねえよ。おめえ、頭が上がらねえな」

「それはもう」

「で、おめえ、幾つだい？」

「文政の六年（一八二三）の生まれで」

弥市が応えると、勝が眼を見開いた。

「同じじゃねえか」

え？ と弥市も眼を丸くする。もっと若く見えたが、三十七か。

と、勝が自分を指さした。

「おれは一月なんだがな」

「ああ、あっしもです。二十八日だったと、実家の母から聞いております」

「やや、おれは三十日だ。ははは、こいつはすげえ、おめえさんと

おれが、母親の腹ン中に仕込まれたのは、ほぼ一緒ってことかえ？
面白え、面白え」
おもしろ

嬉しそうに己おのれの膝を叩く勝を柴田は、何が面白いのかと、呆れ顔あきをしてる。

「こんな偶然めつたは滅多めつたにない。ここで一献、といきたいものだが、生憎あいにくおれは下戸げこでなあ。さて、どうしたものか」

勝が顎を撫でると、

「勝先生」

若い武家が顔を覗のぞかせた。

「申し訳ございません。お客さまでしたか」

「こら、お客さまじゃねえよ。おいらが湯屋に行っている間は留守番あきしているといい置いただろうが。そのせいで、おふたりは門前でうろうろしなすっていたんだぞ」

これは、申し訳ございません、と平伏した。うろうろしていたのではない。あまりのぼろ家に躊躇ちゆうちゆうしていただけだ、と弥市は苦笑した。

「お気になさらず、お顔をあげてください」と、柴田が取り成す。

「お許しいただいて、ありがてえなあ。おめえ、今からひとつ走り

行って、壺屋つぼやで最中もなかを買ってこい」

「先生。壺屋は芝西久保にしくほでございますよ。いささか離れて」

「んじゃ、そのへんの最中で手を打ってやらあ」

そういつて懐なつかしを探ると、一朱金をぽんと投げた。

「早いとこ頼むぜ。残りはおめえの駄賃にしてもいいからな」

拾い上げた若い武家は「行ってまいります」と張り切つて、身をひるがえ翻した。

「よしつ。重畳ちゆうじやう、重畳。あ、今のはおいらの弟子のひとりだ。弟子というよりここに入り浸いつてるといったほうがいいな。今日は皆出払っているようだが、普段は賑やかこの上ない。では最中が届くまで、話を進めるか」

早口で忙せわしないが、なんとも小気味こきみがいい。どんな人物かと構えて来たが、気が楽になる。生まれが同じというのも、何かの縁であろう。

小さな息が柴田の口から洩れた。ようやく本題に入ったという安堵あんの吐息だ。

弥市は、柴田に促され、持参した神奈川台場の絵図面えずめんを広げ、算盤そろばんを出した。

これは、西洋の城郭建造技術をもとに勝が作図したものだ。神奈川宿からほど近い漁師町りやうしまちの海上に造られる。まもなく開港する横浜港のためにも早く完成させなければならぬ。

この絵図面を眼にした時、面食めんくらった。品川に築かれた台場は幕

府勘定吟味役の江川太郎左衛門が絵図面を引いたが、四角形か五角形だった。が、勝のそれは、海側に突き出た尖頭せんとうがあり、蝶が羽を広げたような変わった形をしていた。

さらに、台場の東側と西側には陸地と繋ぐ二本の渡り道がある。

西側の渡り道は途中を削り、舟を通すことが出来た。ふた筋の渡り道の間は舟溜まりふなだとして利用するらしい。

大きさは、六千坪強。品川の台場は一万坪を超えるものがあるの
で、それに比べると規模は小さい。それでも、品川台場同様、海の上
に島を造るといふのだから、大掛かりな普請であることは間違いない。

「で、弥市。おめえさん、三日で幾人集められる？」

勝はまたも笑みを向けた。きつとこれもおれを試しているのだと、
弥市も微笑ほほえんで、自信たっぷりに応えた。

「人夫だけであれば、二千、いや三千つてところでしようか」

柴田は見栄を張るなど咎めるとがように顔をしかめた。と、勝が膝頭ひざがしら
を叩いた。

「剛気ごうきだねえ。江戸ツ子はそうじゃなきゃいけねえや。てえしたも
んだ」

ま、それが出来ればな、と鋭い眼光を放ち、がらりと口調を変え
た。

「おれあ、出来ないことを出来ないと素直にいつてくれれば得心とくしんする。しかし、大見得切おおみえって、いざ事に取り掛かってから、無理でしたじゃ話にならねえぞ。だいたいだな、おめえ、生まれは江戸だろう？ 江戸なら勝手もわかるし、なんといつても人が溢あふれている。けどな、普請場は神奈川宿だ。そうそううまく人夫が集まるか？ 三千を三日で集めるなんざ、古いにしえの武将だつて大変だ」

「お言葉ではございますが、あつしはすでに横浜で多くの普請にかかわっております」

ほう、と勝が眼を見開いた。

「異人のための遊女屋を普請する予定の湊町みなとまちの埋め立て、神奈川宿にほど近い石崎川いしざきがわ周辺の道普請。柴田さまのお話にもありましたように、並木町台場にも携わらせていただきました。ひとつの仕事が次の仕事を生み出しますゆえ、根回しは怠りません。此度の台場普請では、同じく薩摩島津家中に出入りの左官、森田屋もりたやと出雲屋いずもやもおります。もつともふたりの手を煩わづらわせることなく、あつしの定雇じようごいの人夫を含め、程ヶ谷ほどがや、神奈川、戸部とべの人宿、大工、鳶とび、名主なぬしらに一声かければ、あつという間でございますよ」

そう言い放つて、勝をぐつと見返した。勝も負けじと眉根まゆねを寄せる。座敷内が張り詰めた。

眼を逸そらさないふたりの間で柴田が慌わづらてた。

「弥市、失礼だぞ。勝どのも、早う見積もりをお願いいたす」
ふっと勝が目元をゆるめた。

「なかなかいい面構えだ。おめえさんなら間違いないねえ。頼むぜ」
「ありがとうございます」

弥市は深々と頭を下げた。

「で、文にはおれに聞きたいことがあるとあったが、なんだえ」
勝が身を乗り出した。

弥市は、姿勢をただした。

「絵図面の、こちらの部分ですが」
と、膝を進めた。

此度の台場築造で松山藩がなにを差し置いても懸念しているのは、その掛かりだ。今般、大名家の財政は逼迫している。そこにきて、此度の神奈川宿警備と台場の築造は藩庫に痛いばかりで、益がないというのが本音だ。

むろん、幕府の命であるから拒めるはずもない。

弥市が、勝の絵図面をもとに試算したのは七万両弱。勝の話によつては、さらに多くなる可能性がある。

松山藩としては出来るだけ入費を抑えたいのだ。

話は一刻（約二時間）ほども続き、勝は人夫らの手間賃を下げてはどうかと提案したが、弥市は反対した。様々な土工にかかわる人

夫や大工など職人の手間賃には下限がある。ぎりぎりに抑えても、不満が噴き出して、普請に手を抜かれては敵かなわない。しかし、人が増えれば増えるほど、手間賃が嵩むのは当然だ。資材を削れない分、どこを抑えるか。思案のしどころだ。勝の見積もりは、ざっと八万両だった。

柴田が横を向き、そつと溜息ためいきを洩らした。

勝の屋敷を出て、待たせてあった駕籠かじに乗る。柴田が仕える伊予松山藩上屋敷は、虎御門外愛宕ノ下通り沿いにある。

駕籠を門前で降り、柴田とともに屋敷内へ入る。

「疲れただろうが、ご家老への報告もせねばならん。あと少し頼むぞ」

柴田が敷き詰められた砂利じやりを踏み歩きながらいった。

「それにしても、勝麟太郎があのように捌さばけた人物だったとは思っても寄らなんだ。町人のような言葉遣いには呆れたが、幕府も面白い人物を登用いさしたものだ。粋いきな計らいというのであろうかな、最中も美味うまかった」

勝は帰りしな、「お子がいるなら持っていけ」と、最中みやげを土産に持たせてくれた。弥市には十一を頭に、四人の子がいる。

「なによりお前を信用したようで、ほっとした」

「恐れ入ります。やはり生まれが近かったのがよかったのかもしれないが」

「あれには私も驚いた。が、まことか？ 勝どのに合わせたのではなからうな」

柴田が疑わしそうな眼を向けてくる。

「まさか。そこまであつしは策士じゃございません」

柴田が含むように笑う。

家老屋敷で報告を済ませ、ようやく弥市は帰路につく。やはり入費を抑えろと厳命された。

すでに陽が西に傾いている。柴田が駕籠を出してくれたので遠慮なく乗り込んだ。

「お前の店から、中屋敷が近い。また勝どのと相談することがあれば、中屋敷の駕籠を使うよう、手配しておくが」

さすがに、それは固辞した。確かに、中屋敷は、弥市の芝田町の店屋敷とは目と鼻の先だ。が、大家家を駕籠屋よろしく利用するのは、気が引けるどころか畏れ多い。

しかし、辻駕籠より乗り心地がいい。敷物がしかれ、尻も痛まない。多少急いだところで、揺れも静かだ。やはり遠慮などするんじやなかったと少しだけ後悔した。

勝に文を出した。見積もりをさらに詰めるためだ。返書があり、引越したと記されていた。赤坂に変わりはないが、氷川神社ひかわに近く、門前に立って仰天きょうてんした。

まだ木の香りがするような真新しい屋敷だった。裏口へ回ると、先日、最中を買って来た武家が顔を出した。

「あ、先日の」

そういうと、すぐに弥市を角の座敷に案内した。

勝は女子おなじの膝に頭を載せて、耳掃除をされていた。女子がはっと顔を上げ、弥市と眼を合わせた途端、真っ赤になって俯うつむいた。

「こいつは、おれの女房だ。やっと新居が出来たんで一緒に暮らせるようになった。あれはひでえぼろ家だったからなあ、民たみ」

「お客さまが来るなら、そうおっしゃってください」

民という名の勝の妻女は、するりと膝を抜く。支えを失った勝の頭がとんと畳の上に落ちる。それに構わず逃げるように座敷を出て行った。

はあ、と勝は身を起こし、胸元をぼりぼり搔かきながら、「さて、今度はなにを減らそうってんだえ？」

と、口角こうかくを上げた。

「まず会所をどこに置くかです。一年弱の普請となりますゆえ、宿屋いれふだに入札させて、一番安い所に決めるのはどうかと。あっしの他、

森田屋、出雲屋と請負人がおりますので、この三名で会計等切り回し、各職人頭、人夫頭への伝令役は、我らの店の奉公人で賄い、それと手間賃ですが、ぎりぎりまで下げることにいたします」

「ほう」

「ほとんどが長きに亘って従事するわけですから、食い物や身の回りの物は用意し、出来るだけ、人夫らが身銭を切らずに済むよう整えれば、不満も出づらいかと」

なるほどね、と勝は感心するようにいった。

それから、弥市は勝の屋敷を二度訪れ、西洋城郭の普請の仕方を教授してもらおう。この星を二つに割ったような、蝶が羽を広げたような形にした理由も理解した。

正面が直線だと、火砲の位置が特定されやすいが、尖頭を築き、死角を作ること、火砲を隠し、さらに敵へ撃ち込む際にも、二方向、三方向から狙いが定まりやすいという。

勝は、「まあ、撃ってみなきゃわからんが、理屈ではそういうことだ」と、呑気に構えていた。

さらに、勝の屋敷を三度訪れた。用いられる石の数、土の量、一日あたりの人夫、職人の数など、細かく算出して、ようやく概算がなった。柴田とともに、夜通し掛けて仕上げたものだ。結果、勝の出したおおよそ八万両から、一万両ほど少ない見積もりを出すこと

が出来た。

「よくやったもんだね。感心するよ。で、柴田どのはどうした？」

「徹夜だったもので、疲れ果てて寝込んでしまわれました」

実は弥市も寝不足で、頭がふらふらとしていた。ここ二、三日、体調が芳かんばしくない。神奈川宿へ行き、とんぼ帰りすることもあって、疲れが溜たまりまっているのだろう。

「まあ、そうだな、四十半ばくらいのお歳では、くたびれるな。せっかく、壺屋の最中を用意したんだがな。残念だ。さ、弥市食え、食え」

さくりと軽い口当たりだが、皮が口中に張り付くこともなく、餡あんの甘さも丁度ちやうどよい。

「な、うめえだろう。おいらはこの最中が一番好きだ」

と、勝がまじまじと弥市を見る。

「なにか？」

少々頭がぼんやりとしているせいか、言葉が出てこない。

「いや、初めて会ったときから、気になっていたんだが、おめえさんはどうして、土工の請負人を始めたんだ？ 鳶は火消も兼ねているから、ちいっと異なるが、大工や左官といった職人はもともと横の繋がりもある、仲間も多い、なんと言っても普請場をよく知っている。だから土工請負をする者もいるが、おめえは元は商売人だ。」

それが、なぜってよ、気になってならねえ」

ああ、そのことか。弥市は一口かじった最中に眼を落とした。

「つまんねえ話ですよ」

「つまらねえかどうかは、おいらが決めることだ」

勝が最中を手を取った。

天保十四年（一八四三）、弥市が二十一で養子に入った平野屋は、御用達を務めているだけあって、そこそこの分限者だった。京橋新肴町さかなちやうに店を構えており、土蔵があり、店屋敷も広がった。高輪には長屋を持ち、金の貸付もしていた。

養母には、十とおになる娘、富とみがおり、ゆくゆくは弥市と富めあわを娶めあわせるつもりでいたため、入婿いりむこでもあった。まだ富はそのようなことは微塵みじんも思っていないかったろう。

歳としの離れた兄あにが出来たと無邪気むじゃきに喜んでいたくらいだ。

が、養子に入ってまもなく、火事に見舞われ、新肴町から日本橋通りに店を移し、商売を続けた。しかし、移転の翌年、今度は高輪の長屋が燃えた。

養母は運の悪さを嘆いた。が、江戸は火事が多い。焼け出されたことのない者を探すのが難しいくらいだ。当然、長屋に住んでいた者たちは行き場を失った。

その建て直しを万屋よろずや富右衛門とみえもんという棟梁とうりょうに頼んだ。

「その棟梁と出会ったのが、きっかけだったと思います。富右衛門さんは少々変わった棟梁というか、燃えちまった火事場を歩き回っていたんです。鳶とびが使えるような材木やら何やら持っていこうとしていたんですが、焼け焦げた柱や壁はまだ片付けるなど怒鳴っていたのを見ましてね。不思議に思ったずて訊ねたら」

その家のかけらを探していると――。

「つまり、その家で暮らしていた者たちの思い出というんで、あつしは笑つちまったんですがね、でも富右衛門さんは真顔まがほで」

火事は、すべてを奪う。家も暮らしも、命でさえも。自分は火事が憎くてならない、幾度、悲しい姿を見てきたか。おれたちが建てた家が丸ごと灰になるのは悔しくてならねえ、だから、焼け残ったものを探すのだと。小袖こそでの切れ端かんざしだろうが、簪かんざし一本だろうが、欠けた茶碗一つだろうが、暮らしていた証あかしを探し当てたとき、火事に勝ったと思う、とそういった。

それが亡くなった人のものならば、さらに嬉しいと。

「大工や左官、屋根葺ふき、普請ふしにかかわる者たちは、皆、木箱を作っているに過ぎないが、そこで暮らしを営む人がその箱に命を吹き込んだというんです。それを根こそぎ奪い去る災いは許せねえぞうで。変わっているでしょう？」

「それを聞かされて、請負人になろうと思ったのかえ？ 自分もそういう箱を作りてえって。ケツの青いガキなら、飛びつきそうない話だ」

勝は、軽く笑って、二つ目の最中をかじった。

「まあ、それもあります。家つてのは人を守る箱で、仲良く暮らせば、幸せが満ちる箱になり、その逆なら、妬みねたや恨みが詰まる箱になる。そんなこと考えもしなかったもんで、雪駄や下駄を売るだけなのは、面白くねえと思っちゃったのが運のつきでしたよ。もう富右衛門さんは隠居しましたが、付き合いは未だいまにありますよ。あつしが請負人を始めたと告げたら、自分の弟子はむろん、付き合いのある棟梁や、職人の仲立ちまでしてくれました。定雇いしている職人や人夫は富右衛門さんと繋がる者たちですよ。大工は、職人同士はもちろんです。普請の雇い主との結びつきもある。そこからどんどん付き合いも広がる。平野屋が一気に人を集められるのは、富右衛門さんのおかげです」

弥市は、話し終えると、すっかり冷めた茶を啜すすった。

通りを流す振り売りの声が聞こえる。こたつのやぐら売りのようだ、もうそんな季節か。売り声を聞きながら、目蓋まぶたが耐えられないくらい重くなる。まずい、と頭を振ったが、追いつかない。寒気もする。

「おい、弥市、どうした？ 顔色が悪いぞ、おいおい」
勝の声が段々遠くなっていた――。

雨が降っていた。雨はあたりの熱を冷やしてくれるので、助かった。笠と蓑を着け、次第に掘り進められる穴を見ていた。人夫はおよそ八百。

――あたりがぼやけている。これは現じゃねえのか。夢か。

ああ、芝増上寺の境内だ。

弥市は、請負人尾張屋嘉兵衛より、この仕事を任された。すぐさま人夫を募った。

徳川十二代將軍家慶の墓穴だ。嘉永六年六月二十二日に薨去した。町では鳴り物が禁止されるなど、江戸中が喪に服している。

だが、幕閣の面々は困惑しているのだろう。お上が急死したからではない。亜米利加国の軍艦が四隻、浦賀に現れたことで、大混乱しているからだ。ただ、お上がいなくなろうが、亜米利加国への対応はしなければならぬ。

十間（約一八メートル）四方、深さ十五尺（約四・五メートル）の墓穴だ。すでに七月に入った。あと二日もあれば、掘り終わるがここまでで四日かかっている。この暑さの中、亡骸はどうなっているのかと、うっかり考えてしまった。やんごとなきお方に対しこの

上なく不謹慎だ。

尾張屋は、江戸で屈指の請負人だ。薩州家の渋谷屋敷普請が始まった頃に知り合った。しらが白髪頭で、ほそおもて細面で尖った顎をしている。一見、頑迷な近寄り難さがあるが、おとしや狭気に富み、情に脆いところがあった。

この墓穴掘りを尾張屋は、別の者にも下ろしたが、弥市が最も早く、そして多くの人夫を集めた。それが耳に入ったのだろう。その数か月後、尾張屋が落札した品川台場の普請が回ってきた。

「万屋さんが眼をかけているのは、お前さんか。小売り商売上りの請負人なんざ、初めてだ。この生業は人だ。横、縦、斜め、なんでもいいから、繋がることだ。ひとりでも多くかき集めろ。客商売をしていたんなら、それも活いかすといい。これからは、人が売り物だと考えな」

初めて会ったとき、そう尾張屋がいった。

「弥市、気がついたか」

はっとして眼を開けると、勝が心配そうに覗き込んでいた。夜具の中にいた。

「熱があつて、倒れたんだよ。まあ、ゆっくり養生していきな」
勝は立ち上がると座敷を出て行った。

二日世話になり、弥市は迎えに来た奉公人の常吉つねきちとともに帰路に

ついた。

二

会所が決まり、次にそこに詰める者、そして職人、人夫を取り仕切る土工頭取、石方頭取、鳶方頭取、普請場の場所決めと差配をする仕立方したてがたを置き、石運送舟方ふなかた、土舟方の他、味噌や米掛がかり、世話掛、見廻り掛を決めた。皆、これまでの普請場で働いてきた者だ。一つの仕事が終わっても、途切れないよう、盆暮れ、正月の挨拶あいさつは欠かさなかった。他の請負人の定雇いに近い者まで、引き寄せた。

人夫、職人の手配は、別の請負人へも依頼した。その請負人から大工棟梁とうりまようらに声を掛けさせた。そうして、鼠算式ねずみざんに人夫、職人が増えていく。弥市、森田屋、出雲屋の定雇いを加え、たちまち、二千を超えた。

安政六年（一八五九）七月より神奈川台場普請が始まった。連日、二千もの人夫、職人が働いた。

夏の暑さは覚悟していたが、品川に比べて、このあたりはさらに暑く、しかも湿気しっけが酷い。平野屋で抱えている屈強な人夫でも身体からだに熱がこもって、ばたばた倒れた。日陰がないため、手拭いや笠かきで頭を守るしかない。急ごしらえで、休み小屋を建て、山盛りにした

塩樽しおだるをいくつも置いたが、たちまち底が見えた。

海に入って波よけ杭くわいを打つ者たちなど、初めのうちは、

「こいつは気持ちがいい」

と、はしゃいでいたが、塩水と陽射しにさらされ、肌はだが真っ赤に腫れ上がり、寝返りも打てないと泣き言をいい始める。むろん、土を海中に落とし込む人夫たちも同様だ。

大工や左官などは、どんなに暑かろうと、足袋たびを履はき、腹掛け、股引ももひきを着けるが、石工や土工人夫ふんどしは禪ぜんひとつといういでたちだ。陽にじりじり肌が焼かれてしまうのも致し方がない。

弥市は、森田屋藤助とうすけと出雲屋佐七さしちと相談して、小屋をさらに増設すること、塩、水、梅干しの樽をあちらこちらに置くこと、日焼けの酷い者には軟膏なんこうを与えることなどを決めた。

陸で働いているならば、すぐに小屋に逃げ込み休息出来るが、海側にいる者は陸側に来るのも、休んでまた戻るのも難儀だ。

六千坪強の広さの上、陸から台場の先まで、中心線を引くとおおよそ二百間（約三六四メートル）の距離になる。周りを巡めぐってくれば、距離はもっと延びる。

「それなら、屋根舟を出しましょう。そこに樽を置けばいい」

弥市がいうと森田屋が「掛かりがどれほどになるか」と不満を洩らした。

「たいした金高ではなかるうが。人夫が疲れ果てることの方が、一大事だ。完成が遅れば、松山侯のお立場がなくなる」

出雲屋の言葉に弥市も頷く。

「ここに連れてきたのは、うちで抱えている人夫だ。薩州屋敷と品川、神奈川並木町の台場にかかわった。慣れた者をひとりでも減らしたくはない。森田屋さん、棟梁にいつてすぐに舟を出してもらってくれ」

わかった、と森田屋が渋々承知した。

弥市はあたりを見回し、

「常吉、常吉はいるか」

怒鳴った。

もっこ担かぎをしていた若者が振り返り、別の者と代わって、こちらに走って来た。

「お呼びですか？」

常吉は、弥市の養子縁組を世話した者の息子で二十五。すっかり日焼けして、肩や腕の皮が剥むけている。

「おめえは、なにをしているんだよ」

「なについて手伝いですよ。人夫の仕事を知るのも必要かと思いましたが。おれ、大工も左官も、なにも出来ねえから」

「そりゃあ、おれも同じだよ。常吉、宿場に戻って、漁師たちから

舟を借りろ。ありったけの舟を出す」

常吉が大きな眼をしばたいた。

「なにを頓狂とんきやうな顔をしていやがる。海で杭打ちしている者たちが舟で休めるようにする」

ああ、と常吉がぼんと手を打った。

「手伝うのもいい。が、人夫たちがなにに困って、どう不便だか、それも見てやってくれ。それも請負人の仕事だ」

「承知しました。すぐ行ってきます」

常吉が身を翻し、駆け出した。姿がみるみる小さくなる。

「なんとも頼もしいじゃありませんか、常吉さんは。人夫の仕事を
知るのも必要だなどと」

出雲屋が小さくなっていく常吉の姿を、眼を細めて見る。

「先はまだまだわかりませんがね。後々、うちの倅せがれの右腕になって
くれたらと考えておりますが」

潮しおを含んだ風が吹く。

今日も暑くなりそうだ、弥市は呟いた。

大きな事故もなく台場普請は順調に進んだ。石積みの際、幾人かが下敷きとなり、大怪我を負ったが、幸い命に別状はなかった。

すでに海上の台場を繋ぐ、二本の渡り道も完成した。平地には人

夫小屋が建ち、寝起きが出来るようにもなった。なにより季節が移ったことが大きい。格段に作業が捗り、師走には台場を取り囲む石垣の完成を待つばかりだ。

普請の最中、松山松平家の家老がしばしば訪れ、普請の捗る様子を見ては、皆を褒め称えた。そればかりか、白米を俵で数十俵運んできた。人夫、職人らには酒、肴を振る舞った。家老からの賜り物だと言うと皆、感に堪えないという顔をした。

森田屋、出雲屋と三名で、『神奈川砲台』と染めた手拭いを二千近く誂え、土方、石方、舟方、鳶方などに配り、普請の進み具合を称讃して、ともに酒を酌み交わした。揃いの手拭いを使うことで一体感が生まれ、意気も上がる。

そうした様々な心配りが功を奏し、皆一層、力を出す。手間賃について不満をいう者はひとりもいなかったことに、弥市は安堵した。冬に入ってから、しばしば勝が姿を見せるようになった。普請場に来ては、人夫たちの働きぶりを見、時には戯れにもっこを担いだ。人夫たちの小屋も覗き見る。怪我をして休んでいる者がいると、優しく声を掛ける。気さくな人柄と見てか、ほとんどの者たちが、松山家家中の下役人だと思っている。幕府の役人で、台場の絵図面を引いた人物だと知ったら、仰天したに違いない。

勝は視察に来ると、松山藩士がいようが誰がいようが、弥市のも

とに真まつ直すぐやって来る。話し始めは、薬はあるか？ 薪たきや油は足りているか？ だ。

「本日、小屋にいた大工と鳶に話を聞いたぞ。夜が寒いそうだ。夜具を増やせとっておった」

弥市は苦笑する。

「わかりました。出雲屋に頼んで、貸し布団を頼みましょう」

「ああ、それから、禪だ。あと、酒と女もほしいといっていた」

「貸し禪は手配いたしますよ。しかし、酒はまだしも女は用意いたしません。勝さま、そうやって話を聞いてくださるのはありがたいんですがね、あまり行き過ぎると、こっちが困るんです」

弥市はちくりと皮肉を投げた。貸し布団に、貸し禪。常時、二人が普請場にいるのだ。それを調達すれば、いくらかかるのか。しかし、意欲に影響するならなるべく叶かなえてやりたい。とはいえ、またぞろ森田屋あたりが渋い顔をしそうだ。

神奈川宿だけではとても賄えない。程ヶ谷、戸部、あるいは川崎、品川あたりでなんとかなるか。

勝は、台場の上を人夫たちに声をかけながら歩く。

「不平不満は早いうちに解消するのが一番だ。先送りすれば、小さな火種も大火事になる」

「恐れ入ります。肝きもに銘じます」

恐れ入ることじゃねえよ、と勝は笑った。

勝は眼前に広がる海へ眼を向けた。今日はいつもより風が強い。

その分、寒さも増す。海にも小さく波が立つ。白い波頭なみがしらが細かく揺れる。

「石垣が終わったら、土手を築きます。平地を固め、整えたら、番士長屋を建てます。見積もりより安く上がりそうです」

「そうか。松山侯も安堵なさるであろうな」

「こいつは立派な台場になります。これを見たら、異人たちもびっくり仰天、腰を抜かすに違いねえ。船から大砲を撃ちかけてくるような真似まねはしませんでしょう。予定通り、来年初夏には完成いたします」

一瞬、勝が険しい顔けわをしたが、海に突き出た尖頭部分に立った。

「気をつけてください。まだ、囲いが出来てねえし、足場も固まっております」

「大丈夫だよ」

勝は笑って海原を眺める。その横に弥市が並ぶ。

あのなあ、と勝が唇を曲げた。

「弥市、すまねえ。おれは、台場の落成を見ることが叶わなくな
た」

え？ と、思わず口を衝つく。

「どうしてです？ 港が開いて、台場だって出来る。勝さまがいなけりゃ、餡のねえ最中じゃねえですか」

勝はわずかに微笑ほほえんだ。

「亜米利加国へ行くことになった。来年一月半ばだ。今日はおめえに別れの挨拶に来た。無事に亜米利加へ渡れるのか、はたまた無事に帰国出来るかどうかもわからんからな」

勝は首を回して、弥市を見る。

亜米利加国船に幕府正使が乗船し、軍艦咸臨丸かんりんまるがその護衛としてつく、という。勝は、咸臨丸の艦長を命じられたのだ。

「艦長ですか？ そいつはすげえ。けど、亜米利加って国まではどのくらいかかるんで？」

「四十から五十日といったところか。江戸に戻るのは、五月の予定だ」

ということは、五か月近く戻らない計算になる。そのうち船上には八十日以上いる。

その間には悪天候の日もあるかもしれない。蒸気船であろうから、帆舟ほぶねのように潮目しおめに逆えさからず遭難することは少ないとはいっても、危険な航海であることに変わりない。海の藻屑もくずとなることもあるのかもしれない。弥市は勝の顔を覗き見た。が、その不安はすぐに吹き飛んだ。勝の顔は活いき活いきとした気力に満ち、海を見つめる眼は輝

いていた。その瞳にはすでに亜米利加国が映っているのだろう。いや、違う。亜米利加国じゃない、勝はこの国の未来を見ているような気がした。

おそらく命を賭すことになんの躊躇もないのだ。くだらないことを聞くなよ、と勝の表情が語っていた。

弥市は羨ましく思えた。

百両、二百両の請け負いから、こうして七万両近い大仕事を、おれの名で請けられるようになった。別の請負人が落札した仕事の下請けではなく、おれの名でだ。この神奈川台場を無事に造り上げられれば、松山松平家から扶持もいただける見込みもある。

横浜の町作りにも大いにかかわった。湊町の沼地の埋め立て、地ならし、石崎川周辺の道普請――。

横浜の開港は、土工を生業とする弥市にこれまで以上に仕事と金を与えてくれた。使う人夫の数も数百人から数千人と膨れ上がり、店は知らぬ間に大きくなっていった。

人の上に立ち、差配をすることに、ぞくぞくした。おれの一言で大勢の人夫が動く、自分が偉くなったような気がした。雪駄や下駄をちまちま売っていた頃とは違う高揚感があった。

莫大な金を己の裁量で動かす。

もちろん、肩にのしかかってくる責任の重さは、小売商いとは比

較にならない。

大きな工事では、人が死傷することもある。いくら、気をつけていてもだ。品川では幾人の犠牲者が出たか。

力仕事で腕つぶしの強い者たちも多いから、いざこざも絶えない。この台場でも、酔った者同士が取っ組み合いの喧嘩けんかをして、数人が海に落ちた。

だからこそ、己が差配して、やり遂とげた時の満足感けんかは格別だ。やりがいを感じる。

だが、どこかで自分を蔑さげすんでいた。

勝はどこまでも純粋で、新しいことが好きで、常に前を向いている。一点の曇りもなく、思うままに生きている。

勝と接する度に、自分の卑いやしさを突きつけられるような気がしていた。

それは、土工請負が、災害や事故といった不幸の上に成り立つ生業でもあるからだろう。

火事で町が焼け、大雨で水が出て、家や橋が流されれば、土工が必要になる。大工、鳶、左官、人夫を手配して、町を丸ごと片付け、壊れた家屋を修繕し、水害ではたまった泥を浚さらい、道を整える。災害が酷ければ、酷いほど需要が増え、儲もうけに繋がる。

その都度つど、感謝の言葉をかけられるのが辛つらく思える時もある。

もちろん、屋敷の建て直し、新築に携わることも多いのに、だけれど、大きな儲けに繋がるのは、やはり不幸な出来事の時だ。

そのように感じるようになったのは、やはり大地震以降だ。普請

続きで儲けている罪滅ぼしのように、仕事をなくした噺家や役者、

義太夫語りら芸人を人夫として雇った。

尾張屋の嘉兵衛にいわれた。

「おれたちがいなぎや、町の片付けも出来ねえ、作ることも出来ねえ。そりや、大地震の後、普請にかかわる職人は、引く手数多で手間賃もこっちの言い値でいくらでも釣り上がった。そういう卑しい真似をする奴らも大勢いた。けどよ、おれたちは与えられた仕事をしてお金を得ているだけだ。それを恥じることはねえんだぜ」

確かにいう通りだ。必要だから、求められる。そう懸命に言い聞かせつつも、胸の奥がうずく。

だから、どのようなきっかけであろうと、結局、人を助ける仕事であり、町を作る仕事であり、世間の役に立つ仕事であると、思い込んできた。

大名の御用を請け、それが大きな仕事であれば、平野屋の名が知れ、抱えの人夫たちの口も干上がることなく、貧しい山間の村にも仕事を与えることが出来る。

今もそうだ。ここで、連日二千人を越す者たちが汗を流している。

おれは、家族を支え、大勢の者たちの暮らしを支えている。けれど。

ここ五、六年の間に幾つ台場にかかわっただろう。品川、薩州屋敷、神奈川並木町、そしてこの神奈川漁師町の海上台場だ。

台場は火砲を置くための地だ。この国を狙う異国船を追い払うための砲台だ。

それが、必要とされているから造る。

なぜこのようなものが必要なのか。泰平の世であるなら無用なのだ。しかし、そうした危険があるから造らなければならない。

横浜を開港する。異国船が入って来る。異人が大勢やって来る。

おれが埋め立てた沼地は遊女屋になるといふ。異人が遊べる遊郭だ。

耳を疑った。錦絵にしほえで見たペリリみたいな恐ろしい面つらをしたやつらの相手を女がしなくちゃならないのか？ おれなら真まっ平びらごめんだ。

それを承知で身売りする女が果たしているのだろうか。若い娘が、言葉もわからぬ異人の客に媚こびを売り、その身を差し出す。おれは不幸の塊かたまりを造っているんじゃないか。まことに世のために役立つことをしているのか。

そもそも、異国船を受け入れる港を造った後、なぜ大砲を置く台場を造らなければならないのだろう。

台場は敵を攻撃するための要塞ようさいではないか。

勝が口を開いた。

「この先、横浜、箱館^{はこたて}、長崎に続き、神戸、新潟が開港を果たせば、日本は大きく変わる。世界へ門戸を開くのだ。異国との商いも学ばねばならん。先進諸国を知り、新しい知識、技術を取り入れる。おれは、亜米利加国をつぶさに見聞してくる。それが、これからの日本のためになる。なあに、日本が本気を出せば世界に追いつくのもそう先のことじゃねえ。そうおれは信じているよ」

勝の強い思いが伝わってくる。が、弥市には得心出来ないこともある。勝のように、日本のため、世界に追いつく、という開明的な考えがある一方で、攘夷^{じやうい}という、異国を敵視し、排斥する考え方も根強い。異国に侵略され、支配下におかれる屈辱。本当に、この横浜開港で日本が豊かになり、先を行く欧米諸国と肩を並べる国になれるのか。

「おい、さつきから浮かねえ顔をしているなあ。おれが、亜米利加国へ行くのがそんなに癪^{しゃく}に障^{さわ}るかえ？ 落成を見ねえのが気に入らねえか」

「そんなことはありませんよ。航海の心配はしております。もちろん台場の完成をお見せ出来ないのは残念ですが」

「で、おめえさんはどっちだえ？」

勝がいきなり訊ねてきた。

「異国は嫌いか？」

それは、と弥市は口籠もる。突然のことに言葉が出てこない。いや、勝はこちらの心を見透かしているのか。

「どっちだえ？」

勝がどのような答えを望んでいるのか、はかりかねた。が、

「あつしは、嫌いです。だから台場を造っているのだと思います。

異国船が怪しげな素振りを見せたら、こつちからも火砲の弾をお見舞いするのでしょうか？　ここはそういう所じゃねえですか。異国と

戦になるかもしれない、異人が入ってくればどんどんこの国を踏み荒らすかもしれない。その怖さは拭えっこありませんや」

弥市は、はつきりと口にした。

「だよなあ。おめえも攘夷つてやつか」

「そういう小難しいことじゃねえですよ。知らねえ相手は怖いに決まっているじゃねえですか。だから、異国を迎え撃つための台場を造っている。でもね、おれは別のことも感じるんですよ」

なんだえ、と勝が訝る。

「ご公儀のやつてることは矛盾だらけだつてね。ペルリが怖くて、品川に海上台場を造った、けど結局、異国に港を開くよう説得されちまった。だから横浜に港を造った。それなのに、今度もまた台場だ。おかしいでしょう？」

勝が笑みを浮かべた。

弥市はむっとして、さらに言い放つ。

「勝さまは頭がいい。異国のこともよく知っている。だけど、あつしら町人は、知らねえことが多すぎる。お上のすることに何も文句がいえねえ。せいぜい、徒党を組んで米屋や商家を打ち壊すくらいだ。品川の海上に出来た台場は、今じゃ、錦絵にも描かれるほどの妙な名所になっちまった」

だから町人は、あれを見て、お上が懸命に江戸を守ってくださいっている、そう信じ込まされている。

「なるほどなあ、おめえは面白いことをいうなあ。当たらずといえども遠からずつてところだ。そうさ、おめえのいう通り、品川の台場は、まあだ使い物にならねえよ。日本の火砲じゃ、沖まで弾が届かねえんだ。一町（約一〇九メートル）ってところかね。かたや、西欧の火砲の飛距離はその十倍もあるってんだから、太刀打ち出来ねえ。あすこは浅瀬だから、むろん船が入ってくるのは難しいが、火砲を撃ちかけられたら、台場はおじゃんだ」

ははは、と高らかに笑い出した。

「笑い事じゃねえよ、勝さま。あすこの台場は役立たずだっていうんですか。じゃあ、なんのために造ったんだ。干潮時にしか作業が出来ねえから、夜通しつてこともあった。篝火（かがりび）だけじゃ追っ付かぬ

え。幾人怪我をして、幾人死んだと思っているんだよ。御殿山を切り崩して、土を運んで——ここだって、同じだ。なんのために造ったんだよ！」

弥市の劍幕けんまくに土を運んでいた人夫が驚いて、立ち止まる。

勝は笑みを引っ込めて、弥市をしかと見つめた。

「なんのためかと問われれば、海防、国防のためとしかいいようがないだろう。ただな、諸国の大名も徳川も、所詮しよせん、見栄と安心のためだ。奇しくもおめえは答えを出しているんだよ。異人たちには、あつという間に台場を造ったと国の力を示すことが出来るだろう？ 面白い話がある。台場の火砲は、見えるように置かれている。要塞なのに、どこに火砲があるかわかっちゃまうんだ、敵には好都合、手の内を晒さらしているのも同然だ。なぜ隠さねえかって、そいつは陸地から見えたときに、皆が安心するからだよ。あすこに大筒おおつつがあるから、異国が攻めて来ても安心だ。お上は自分たちを守ってくれているとな。張り子の虎だ。おれは、兵法を弟子に教えているが、こうした戦法があるのかって感心したよ」

冗談めかしているながらも、勝の顔は真剣そのものだった。

「それが、悲しいかな 政まつなんだよ」

政つてのは、そういうものなのか。弥市の胸の中にふつふつと怒りが湧いてきた。

「そんなお為ごかしのために、台場を造ったっていんですかい？ おれは得心出来ねえ。半年以上もかけて、人を集めて、それで無駄なものも造ったってんですか？ 役にも立たねえ代物しろものを、おれたちは必死に造っていたというんですか！」

勝は怒りに震える弥市を一瞥いちべつすると、再び海を見た。

「その通りといたら、おめえはさらに怒るんだろうが、おめえたちが台場を築くことで、なにが起きた？ ここにかかわった人間には銭ぜにが支払われる。石材、材木を調達した所にも銭が落ちる。神奈川宿周辺の宿屋むじや、飯屋、貸し布団も貸し禪もそうさ。人夫たちが女を買いに走れば、そこにも銭が落ちる。品川台場もそうだったはずだぜ。あちらこちらが潤うるおって、銭が回る。おめえの懐ふところにだって、たんまり入るだろうよ」

「ですが、いくら金が入ろうと、いらねえものを造ったって」

「弥市。おめえは勘違いしているぞ」

勝が優しい眼まなこを向ける。

「品川の台場は役立たずかもしれないが、はったりにはなった。だけど、ここはな、この神奈川台場は違うんだ。戦のためじゃねえし、異国にはったりかます砲台じゃねえのさ」

そういつて勝は再び海を眺めた。が、いきなり身を翻し、大きく息を吸い込むと、口元に手を当てた。

「ありがとうよ、皆の衆」

だいおんじょう
大音声でいって、深々と腰を折った。作業をしていた者たちが突

然のことに驚いて、手を止めた。勝は頭を垂れたままだ。こうへ

「な、なにをなさいます。お顔を、お顔をあげてくださいえ」

「いいんだ、弥市。おれはこうしたいからこうしている」

勝は幾分顔を上げ、口を開いた。

「おれも少しは土工の知識がある。だからこそ、絵図面が描けた。

けどな、実際に台場を造り上げるのは、おれでもねえ、松山侯でも

ねえ。弥市、おめえたちだ。おめえたちが昼夜分たず、汗水垂らし、

力を尽くしてくれるから、形になる。おれは、そいつに感謝してえ。

心の底からありがてえ。そう思ったから、頭を下げる。当たり前のことをしてなにが悪い」

「勝さま」

「まことに嬉しい。嬉しいのだ」

声を震わせながら、勝は顔を上げ、続けた。

「亜米利加、フランス 仏蘭西、イギリス 英吉利、多くの異国船が横浜の港にやってくる。

沖に停泊して、その国の旗を翻す。どうだ、いい眺めじゃねえか。この台場は、戦のためなんかじゃねえ。異国船のために、歓迎の祝砲を撃つ。時に礼砲を撃つ、そういう台場だ」

祝砲、礼砲——。

「ここは世界に向けて日本という国を知らしめる、最初の台場なんだ。おめえたちは、この日の本が世界に門戸を開くための砲台を造っているんだ。誇りに思え。おめえたちが、力を尽くしている仕事は、これからの日の本のためになるんだ。未来を拓くのだ。そういう仕事をしているんだよ」

日の本のための仕事。おれは——。誇っているのか。胸を張っているのか。

弥市は、振り返って海を見た。

まだ静かな横浜の海に、多くの異国船が浮かんでいる。祝砲が台場から撃ち鳴らされる。世界に向けて宣言をするように。その光景がまざまざと浮かび上がった。

未来を拓く——。弥市の心が震えた。

と、

「ああ、寒いな」

勝が鼻を擦り上げた。

「なあ、弥市。亜米利加国に行くのは、まことに楽しみであるのだが、ちよいとばかり船に乗るには心配事があったな」

「勝さまは軍艦操練所頭取でございましょう？ 船の上でも、陸と同じ暮らしが出来るんじゃないんですか？」

「船は好きだぜ。けどなあ、長崎にいた頃、知ったんだが、おいら

船に弱いんだ。酔っぱらっちゃもうんだよ」

まいったぜ、と豪快に笑った。

熱い語りから、いきなり船酔い話とは。やはり忙しいお人だと、弥市は苦笑した。が、どこか矛盾を抱える心の内を見抜いてくれたような気がして嬉しかった。

とはいえ船に弱いのは笑い事では済むまい、八十日を船でどう過ごすつもりなのか。船酔いは苦しいというが、ともかく無事に戻ってほしいと願うばかりだった。

その後、普請は進み、師走の末に芝田町の家に戻って、正月を家族とともに祝った。年明け四日には、再び神奈川宿へ赴いた。

万延まんえんと元号が変わった四月末、神奈川台場が落成した。

会所には、大目付の柴田、森田屋と出雲屋も顔を揃え、祝いの酒を酌み交わす。

「弥市さん、諏訪社すわしやに簡単な櫓やぐらはもう作ってありますんで」

森田屋が嬉しそうにいった。

「なにをする気だ、弥市」と、柴田が訝る。

「宿場にも色々と力を尽くしてもらいましたので」

弥市は、諏訪社すわしやに鳥居とりいを寄進した。この社は、あたりの鎮守ちんじゆとして古くから尊崇そんすうを集めている。横浜開港あたりの地もこれから賑わうことになるだろうが、もともとは半農半漁の村で、漁師はこの

諏訪社の灯明^{とうみょう}を目印にして漁を行っていると聞いた。

火伏せの神が祀^{まつ}られているが、漁師を守っていたのなら、これから多くの船が行き交うこの地を引き続き見守ってくれるだろうと思っただ。

「常吉、用意は出来ているか？」

「はい、もちろん。たつぷりと」

「では、着替えて、行くでしょうか」

弥市は、柴田と森田屋、出雲屋を促し、駕籠に乗り、諏訪社に向かった。

境内に収まりきれないほどの人だかりが出来ていた。柴田が眼を瞠^{みは}る。

「これは。なるほど、そういうことか」

「柴田さまも一緒にいかがですか？」

弥市が声を掛けると、

「私は、遠慮しておく。この場に勝どのがいらっしやらないのが残念だな」

柴田は、さも残念そうな口振りでいうと社務所の方へと向かった。すでに帰路についているはずだが、今頃、どこの海にいるのか。無事に戻れば、きっと台場をみてくれるはずだ。

弥市ら三人は櫓に上がる。見下ろせば、知った顔がちらほら見え

た。宿場の小間物屋、居酒屋の親父、古手屋ふるてやの女将おかみに、旅籠はたごの仲居なかいは勢揃いだ。大工や石工、人夫たちもいた。櫓を取り巻き、皆が弥市を注視する。

「いずれも様のおかげをもちまして、神奈川台場は落成の運びとなり、厚く厚く御礼たてまつる次第でございます。湊町横浜の末長い繁栄を祝しまして」

高らかに声を張ると同時に、一升枡ますを手にした森田屋と出雲屋が、百文銭を投げた。わっと歓声上がり、皆が手を伸ばし、あるいは袂たもとを掲げ持ち、凶々ずうずうしい者は笠を裏返し、降ってくる銭を受け止める。さらに餅もちを撒まく。群衆が右に左にと揺れ、簡易な櫓がぎしぎし鳴った。

「誇りに思え。おめえたちが、力を尽くしている仕事は、これから先の日の本のためになるんだ。未来を拓くのさ」

群衆の中から、勝の声が聞こえたような気がした。

神奈川台場の入費が勝の見積もり八万両を一万二千両ほど減縮したことで、松山藩は大喜びだった。

弥市と森田屋藤助、出雲屋佐七の三名はその功を以てもつ、松山松平家より、十人扶持ぶちを賜り、小葵紋付こあおいもんつきの袴かみしもを与えられた。

その夜はむろん宴うたげを張った。

年が明け、万延二年（一八六一）を迎えた。

弥市は、薩摩島津家、松山松平家の土工請負として、多忙を極めていた。だが、実母を失い悲嘆に暮れているところに、所有の船が真鶴沖で遭難したという知らせが届いた。

三年前、養母を連れ、熱海へ湯治に出掛けた際、温泉を所有する者たちと知遇を得て、熱海の湯を樽に詰め、江戸で売り捌く商いを思いついた。これがなかなか繁盛したが、それを積んだ船が沈んだ。積荷が多く、船が耐えられなかったせいだ。

損は出たが、取り返すことの出来るものはいい。初冬、次男が八つでこの世を去った。実母に続き、身内の不幸が重なった。

消沈する弥市は、松山藩から神奈川宿に出向くよう申し付けられた。台場築造の土取り場となった権現山に陣屋を建てることになったという。その普請を請け負うことになったが、次男を送ってまだ四日。とてもじゃないが、足を運ぶ気分ではなかった。代わりに、常吉をやるうとしたが、若殿も見分に来るということで、行かざるを得なくなった。

薄暗いうちに家を出る。身がこごえるほど寒いのは、心持ちのせいでもあるのだろう。陽が昇り、いくぶん温かくなったものの、赤く色づく葉を見ても鬱々として楽しめなかった。

権現山の石段を登りきったとき、見覚えのある後ろ姿に眼を疑った。若殿や、作事方、そして柴田もいたが、まったく眼に入らなかった。ただただ、そのひとりに気が引きつけられた。

「勝さま」

弥市は駆け寄った。振り返った勝が大口を開けて、両手を広げた。

思いがけない再会は、いつとき、悲しみを癒した。

「おお、弥市、久しぶりだ。息災か」

「それはこっちの台詞せりふでさ。亜米利加国から、無事にお帰りになったとは話は聞いたものの、お忙しいようで、お会いするのを控えておりましたが、このような所でお会い出来るとは。あちらはいかがでしたか？ どのような国でしたか？ 台場はご覧になりましたか？」

一気に捲まくし立てると、若殿が、不機嫌な顔をした。

「おいおい、弥市。積もる話もあるが後にせい」

柴田が厳しい声を出した。

弥市が肩を竦すくめると、勝が肩を揺らしてくすくす笑った。各所で異人斬りが頻発ひんぱつしていたこともあり、警備を強化するための陣屋だ。勝は建設にあたり、番士の数、武器などを含め、小競りこぜ合いや万が一に備えての助言を求められたという。

陣屋の縄張りをして、その日は、神奈川宿に宿を取った。宿場の中心から少し離れた台の坂の街道脇には、二階建ての料理茶屋が建

ち並び、窓からは海が見渡せ、天気の良い日には遠く房総ぼうそうまでが見えた。

ここからは、台場も眼下に、その全景が望めた。

「ああ、たまらねえ。こいつはいい景色だ」

「ご満足いただけましたか」

「むろん、台場には赴いたが、こうして上から眺めるのは格別だ。まさにこうもりのような形だ」

「あつしは揚羽蝶だと思いましたが」

「へえ、なかなか粋なことじゃねえか」

と、料理茶屋の主人が、膳を持った仲居とともに顔を出した。

恭うやうやしく、勝の前におくと、皿の上には山盛りの牡丹餅ぼたんもちが載っていた。

主人に、勝が甘味好きだと告げておいたので、急ぎ一里り（約四キロメートル）強を駕籠で飛ばし、隣の程ヶ谷宿の名物である牡丹餅を買ってきたのだ。

主人が挨拶を終えて、引き取ると、

「おめえも、ここで随分ずいぶん、銭を使っただろうからなあ」

「ええ、銭は回しませんと」

弥市はかつていわれた勝の言葉を返した。

勝は亜米利加国までの航海の様子を牡丹餅を食いながら話し続け

た。喉が詰まるのではと心配するほどだ。暴風雨に遭い、死にかけたとか、熱病を患い、ほとんど寝ているうちについたとか、日本人だけで大海原を航海したのは素晴らしいと、着飾った婦女子に褒めちぎられ、冷えた乳臭い甘い菓子を食べたとか、嘘かまことか、ただただ弥市は耳を傾けた。

「でな、おれは一つだけ残念なことがある。亜米利加には、蒸気で走る鉄の車がある。サンフランシスコで正使一行と別れ帰路についてしまったので、おれは乗り損ねたが、奴らはそれに乗って移動したらしい。鉄の道が敷かれ、その上を走るので。蒸気船ならぬ、蒸気車ということだな。たくさんの人や荷を乗せて、あつという間に別の土地に連れて行ってくれる。おれは、模型はみたことがある。ペルリが幕府に献上した土産物の中にあつたのだ。が、本物に乗ってみたかった、それだけは後悔しているよ」

弥市にはとても想像がつかない。

「駕籠、いや馬より速いってことですか？」

「当たり前だ。轟音を立てて、煙を吐き、飛ぶように走るのだ。むぐっ」

勝が牡丹餅を詰まらせた。弥市は慌ててその背を叩いた。勝は、咳き込みながらも、

「いずれ、日本にも敷かれることになるやもしれんぞ。鉄の道がな。

その上を走る車もだ」
楽しそうに微笑んだ。

勝と、またの日に、と約定を交わしたが、それから後、会うことは叶わなかった。

神奈川宿からの道中、

「これから、徳川がどのようになるのか、予想がつかん。おれはどうするか、そのことで、今は頭がいっぱいだよ。日本に戻ってすぐに、大老が水戸浪士に暗殺されたことを知った。これで幕府は終わりだと思ったのさ」

勝は世間話をするようにいった。

「ご公儀が終わるとは、どういうことですか？」

弥市は戸惑い、訊ねたが、その答えはなかった。しかし、その横顔を窺い、はっとした。

勝の顔が苦渋に歪んでいた。ついぞ見たことのない顔だった。

それでも、弥市の身边は変わりなく過ぎていった。毎年正月には、松山松平家と薩摩島津家の手斧始めに赴き、新たに始めた薪炭問屋、熱海温泉樽売問屋も変わらず営み、土工請負も途切れることがなかった。

十四になった長男を、鉄砲洲の炭問屋へと奉公に出した。土工請負を引き継がせるには手元に置いてもいいかと思つたが、薪炭問屋を営んでいることから、同業の間屋で商いを学ばせるのが肝心だと思つたのだ。弥市も十二の時、奉公に出ている。

出雲屋と森田屋のふたりが、伊勢参りに行く前に顔を見せた。旅に出る前には水盃みずさかずきだが、近くの居酒屋に入った。

そこで長男の奉公話をすると、

「息子さんは、立派に跡を継げるよ。忙しい弥市さんの代人だいにんでご近所の慶事にも弔とむらいにも出ているじゃないか」

出雲屋が銚子を掲げて、弥市に向けた。

「それに比べて、うちの倅は遊び好きで、どうにもならない」

「それは親に似たんだろうぜ」

森田屋が混ぜ返すと、

「おれは左官として真面目まじめにやってきた。腕も悪くねえ。でも倅はなんとも思っちゃいねえ。それは、弥市さんがいけないんだよ」

出雲屋が唇を尖らせた。

「もう、酔っているのかえ？　なんで、おれのせいだ」

「あんたは、職人から請負人になったわけじゃない。小売の商売人からだ。それを倅がいうのさ。職人の修業なんざしなくても土工請負人にはなれるってよ、金勘定さえ出来れ、ば……」

と、いいかけて出雲屋が口を噤んだ。すまねえ、弥市さん、と項垂れた。

弥市は、首を横に振った。

「まことのことだ。構いませんよ。ただ、当世風の若い者はみんなそういう心持ちなんでしょうかね。このご時世だと」

森田屋が、ううと唸った。

「どうにもね、ご公儀も大変だよ。お上が、天朝のお姫様をご正室に迎えたそうじゃないか。それで、開国したお怒りを帳消しにして、公儀と天朝が手を結ぶんだってわけだ。なにより、聞いているかい？」と、森田屋が突然声をひそめた。

京にいる薩摩藩の中で倒幕を掲げる者がいるというのだ。公武合こうぶがっ体を望んでいた島津久光は、それを危険視しているらしい。

「血腥ちなまぐわいことにならなきゃいいがと、薩州屋敷もピリピリしている。攘夷だの尊王だの、聞き慣れない言葉がこの頃じゃ、お武家の間で飛び交っている」

攘夷は異人の排斥、尊王は天子を敬うことだ。それぐらいは知り得ても、じゃあ、なにがどうなるのか、結局、お武家はなにをしたのか、下々にはわからない。伝わらない。

次第に世情が不安定になりつつある気配を感じ取りながらも、日々は続くのだ。

「けどなあ、また三人で大仕事をしたものだなあ」

出雲屋がいった。

「その時は、息子さんも加えてやりましようか」

「おいおい。けど、ありがてえよ。あんたの仕事ぶりを見りゃ、あいつの性根しよつねもしゃんとするかしれねえ」

出雲屋は顔をくしゃくしゃにして笑った。

しかし、それからまもなく、弥市のもとに、その出雲屋の訃報ふほうが届いた。

伊勢参りに出掛けた先で死んだというのだ。

弥市は、寝間に籠もって、ひとり泣いた。また大仕事をしたいと
いっていたあの言葉が宙に浮く。

さらに追い討ちをかけたのが、長男の死だった。市中に蔓延して
いた麻疹はしかを患わずらったのだ。奉公先から戻され、家で息を引き取ったの
が、せめてもの救いだった。また棺桶をこの家から出し、表戸には

「忌中きちゆう」と張り紙をしなければならぬのだ。気が沈む。

子どもに先立たれるのは、身を削られるような思いがした。すで
に男児を三人、見送った。長男は十四まで生きた。真面目な子だっ
た。次男が死んだ時も、母親の側に寄り添っていた。そんな優しい
子だった。きつといい若者になると思っていた。土工請負は、多少
度胸がなければ、務めるのは辛いだろうが、跡を継いで常吉ととも

に守り立ててくれると考えていた。人の望みなど、あてにはならない。

弔いを済ませ、いまだ涙も乾かぬうちに、思いも寄らぬことが起きた。

店に飛び込んできたのは、薩州屋敷に出張っていた奉公人の中吉だ。屋敷からは、さほどの距離ではないが、中吉は青ざめた顔で、滝のような汗を流していた。

「大変でございます」

初七日が済んだばかりだった。弥市は苛立ちを隠さず、中吉を睨めつけると、

「喪中になんの騒ぎだ。人夫同士のいざこざなら、お前が処理しろ」怒鳴りつけた。

中吉は、はっとして思わずその場にくずおれ、平伏した。

「申し訳ございません。ですが、島津家のお行列が、生麦村において、異人斬りを」

弥市は眼を剥いた。島津久光が江戸に下って来ているのは知っている。そういえば、今日、出立するはずだった。その行列が、異人斬りをしたというのか。

「お作事方の伊集院さまは」

「はい。伊集院さまより、帰るよう申し伝えられ、私も人夫を引き

連れ、お屋敷を出て来たので。屋敷内は騒然としておりまして、何もわからずじまいではありますが。どういたしましょうか？」

唇を噛み締めた弥市は、

「おれたちがかかわることじゃねえが、ともかくお屋敷お出入りの者たちに報せよう。常吉、七五郎、いるか」

弥市は踵きびすを返し、廊下を進んだ。森田屋が懸念していた通り、四月、京の寺田屋で久光の命を受けた者が、自国の藩士ざんさつを斬殺した。一体、世はどうなっていくのか。

「これで幕府は終わり」

神奈川宿での勝の言葉が甦よみがえってきた。

弥市は、横浜湊町の岩亀楼がんきろうに上がっていた。

ここは、横浜開港前に沼地だったのを弥市が埋め立て、地ならしをした場所だ。

居留地の異人や、異国の兵士が登楼する幕府公許の遊女屋だ。異人ばかりでなく、別棟べつむねでは日本人も遊ぶことが出来た。

弥市は、横浜の吉田新田にある沼の埋め立てを請け負い、その見分の帰りに立ち寄った。吉田新田はもともとが埋立地であるのだが、一ヶ所が沼地になっており、そこにも土を入れ、地を固めるのだ。

横浜はどんどん町が広がっている。少しでも使えるところを広げた

いのが幕府の思惑なのだろう。

だが、それすらも、仕事になるのかはわからない。生麦の事件以降、英吉利国と戦になる、居留地の英吉利国兵が報復に出る、という噂が飛び交い、それは横浜はもとより江戸まで恐怖に陥れた。

弥市は、薩州屋敷に店が近いことから、万が一を考え、女房と子は、渋谷に移した。

「ごめんなんし」

襖が開いて、妓がようやく来た。他の客を袖にするからという言葉を真に受けて、もう半刻（約一時間）ほども待っていた。台の物もあらかた食ってしまい、酒もない。いい面の皮だ。

「弥市さま、台の物、頼みましようか？ お酒も」

「あげは。もういい加減待ちくたびれた。おりゃ、寝るぜ」

「それは、あんまり」

と、あげはがするりと身を寄せてくる。いい香りがした。衣裳に香を焚きしめているのだろうか、弥市の遠い過去に嗅いだ香りに似ていた。それがいつのことなのか、思い出せない。

香りは何か、と訊ねても、あげはは決して教えてくれない。

「教えてしまったら、もうお顔を見せてくれなくなりんしょう」と、いって紅い唇に人差し指を当てるのだ。

これで、五度目の逢瀬。沼地の見分はあらかた終わったが、帰ら

ずにいる。弥市はあげはの肩を抱き、引き寄せた。愛らしい容貌ようぼうをしていたが、妓は誰でもよかった。あげはという名が気に入っただけだ。

どこか、疲れてしまった。息子の喪がまだ明けぬというのに、親父は女郎を抱いている。

ああ、そうだ、ここも沼地であったのだ。それを埋め立てたのは、おれだ。

地面を固めなきゃ、ずぶずぶに沈んで行く。

徳川は、泥沼に沈みかけている。引き上げることはもう無理なのかもしれない。

この先、薩摩島津家、松山松平家ともに、土工の仕事は入らないだろう。それどころではなさそうなのが、屋敷に出張っている常吉、中吉からの言葉の端はしばしから窺い知れた。

天下を揺るがすような事態。これも災いとするなら、また大きな普請が次々と舞い込んでくるかもしれない。勝さま、おれは日本のための仕事が出来るだろうか。

八ツ口から、手を差し入れ、胸乳むなちをまさぐる。

あげはの唇から、小さく息が洩れるのを、弥市は顔を寄せて塞ふさいだ。

(つづく)